
幻想街

百瀬華音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想街

【Nコード】

N1708A

【作者名】

百瀬華音

【あらすじ】

どこかにあるという幻の街、幻想街。そんな街のとある一日を見てみよう。

「こんにちわあ、ビルシさん」

藍色のローブに、大きな飾りのついた杖を持った女の子が1人、大きな声で挨拶をしながら図書館へと入ってきた。図書館では静かにする、というのが最低限のマナーだが、この子の頭にそんなものは存在しないようだ。

ビルシと呼ばれた男性が静かにしないとダメだろ、とたしなめると、エヘへと笑ってごまかす。そんな女の子の態度に呆れたようにビルシため息をつく。迷惑そうな顔をし、愛想程度に微笑みかける。「珍しいね。ここに来るなんて。何か読みに来たの？」

ビルシは相変わらず図書館に入り浸っている。図書館にビルシあり、本の虫という言葉はビルシのためにあると言っても過言ではない。

「うっん」

ふるふると小さく首を横に振る。

「町長さん探しているの。心当たり、なあい？」

「……うっん。あの人はいつも仕事さぼってるからなあ……。図書館の蔵書もなかなか増やしてくれないし、住人の受け入れもサボってるし……」

ブツブツと文句を言っている。

きょんとした表情で覗きこむ女の子に気づくと、慌てて手に持っていた本に再び目を戻した。すると、女の子は思い出したように、また明るい声をあげる。

「あのねえ、広場のおじいちゃんがね、探しといてって。ビルシさんも見かけたら声をかけておいてね」

「うん。わかった。あ、そうだ。ちゃんと勉強はしてるの？魔法の練習してるって聞いたけど」

最近、街のはずれで練習している姿がよく見られる。卒業試験に

向けた実技練習らしい。先生の付添いがあるとはいえ、不安が募る。というのも、筆記試験はいつも満点のくせ、実技ではマイナス点をつけられるという魔法音痴だからだ。いくら筆記が良くても使わないことには意味がない。

「ん……？エヘヘ。実はまだ、あんまり上手くできなくて……。先生に助けてもらってるの……」

ペロ、と舌をだす。その仕草が子供らしく、何ともかわいらしい。ポンと頭におくと、驚いた声をあげるが、すぐに微笑む。くしゃっ、と髪を乱すように、少し乱暴に頭をなでる。

「じゃあ、ちやあんと練習しておかなきゃ。そうだ、魔法についての本もあつたと思うから、読んでおきなよ」

「ええ〜。字い読むの苦手〜。先生の話聞いてるだけでいいもん」
「こらこら。それじゃ、いつまでたっても上手くならないよ？」

ちよつと意地悪く言つと、苦虫を噛み潰したような顔をして、うらめしそうに見上げる。ビルシさんの意地悪つ、と両手を振り回す様子が面白くて、またつつついてみたくなる。

「ふ〜んだ。もういいもん。絶えっ対に上手くなって、見返してやるんだから！！」

じゃあね、と怒りながら言つとパタパタと走り出した。ビルシが図書館では静かにする！と注意すると、ピタツと立ち止まり振り向く。ベツと舌を出すと、今度は静かに足音をたてないようにして図書館を出て行った。

「あいかわらず賑やかな子だなあ……」

ビルシは、図書館を出るなり走り出した女の子の背を見ながら、静かに笑った。

「町長さあ〜ん！！どこ〜！？」

そんなところにいるはずもないのだが、ゴミ箱の中やら、木の中を覗きこんでいる。パタパタと街中を走っていく様子がまるで子犬のようで、人々の笑顔を誘う。もっとも、本人は愛嬌を振り

まいている余裕などない。

何度同じ場所にたどり着いただろう。いい加減疲れてきた。噴水のそばにへたり込んでいると、見かけない顔が話しかけてきた。

「どうしたの？ 何か探し物？」

「あ……。町長さんを探しているんですけどお……」

知っているはず不是吗ね……。と答えも聞かず、表情を暗くする。

このままではいかん、とでも思ったのか、旅人は搾り出すようにして考え込むと、独り言のように町長の名前を口にした。

「町長つて、キッズフォルテだよ……。あいつ、さつきドラゴ……」

「コラコラ！こんなところで油売ってんじゃない！！」

旅人が町長の居場所を言い終える前に、罵声が飛んだ。声の主はツカツカと旅人に近寄ると、グイと腕を引っ張る。

「せっかく人が船の出港準備の手伝いをしてあげようつてのに、船長さんは何をやってんの！？」

すごい形相で睨みつける。旅人は逃げようとしながらも、腕をつかまれ、顔をそむけることしかできなかった。

「いや、だって皆どつち行っちゃったからヒマだなあ……。つて」

「観光に来たんじゃないつて！ 買出しに立ち寄っただけなんだから、すぐに出発するよ！？ さつさと戻る！」

「え……。！？ちょ……。あ、ゴメンね。力になれなくて」

「さつさと来る！！」

旅人は急に現れた人に連れ去られてしまった。せっかく町長さんの手がかりをつかめたのに、とショボンとする。とりあえず今は見送るしかなかった。

「さつき、ドラゴ……。つて言ってたもんつ。ここ……。だよね！？」

怖いのか、ビクつきながらゲートをくぐる。ゲートの向こうから何かの鳴き声が響いてくる。地面から伝わってくる唸り声に一歩

さがってしまったが、大丈夫！ と気合を入れて進んでいく。
ここはドラゴン飼育所。現在トレーナー募集中。ちなみに町長も
トレーナーの1人だ。

女の子がドラゴン飼育所に立ち入ったその頃。

「……ふう」

ビルシは分厚い本を閉じた。やっと読み終えたのだろう。
本を元あった棚へと戻すと、カウンターをチラッと見てため息を
つく。振り返ることもなく、どこかトゲを含んだ口調で言った。

「……ルーディがね、探していたよ」

ルーディというのは、あの賑やかな魔法使い（見習い）の女の子
のことだ。

本の背に指を当て、目当てのタイトルを探す。ピタリと指を止め、
背表紙に指を掛け、一気に引き抜く。ちらりと一度カウンターを見
やると、パラパラとページをめくる。

「いい加減にしなよ。町長さん？」

本を見ながらビルシが声をかけると、カウンターからひよっこり
と顔を出す。町長は口を尖らせて、言い訳がましく言った。

「……さっきまでパトロールに行ってたんだって」

コレが幻想街の町長だ。立ってみるとそれなりに身長があるのだ
が、まだ幼い顔立ちをしている。プイと顔を背ける。

「ここが最後だよ」

「パトロールもいいけれど、他にもやることがあるんじゃない？」

ビルシが軽く睨みつけると、町長はふてくされた。町長といつて
も、若干13歳。しかもくじびきで決まった町長だから、しかたな
いのもかもしれない。

ビルシといえば町長になりたくても、なかなかないという脅
威のくじ運のなさを誇る。現町長からしてみれば“うらやましい”
人だ。

「俺、まだ13だけど？それに――」

「13だろうが子供だろうが、くじびきで決まった町長だろうが、町長は町長。しっかりしないと」

言い訳をしようとしたところにビルシに言われ、肩をすくめた。もうわかったよ、と蚊の泣くような小さな声で言った。

「あ、そうだ」

「もう、お説教はきかないからな！」

町長がそう言うと、ビルシは首を横に振った。

「ルーディ、まだ町長を探しているよ……」

「あ……」

2人の思ったとおり、ルーディはまだ町長を探していた。

ドラゴンに囲まれ、泣きべそをかきながら腰が抜けた状態で助けを呼んでいたのを旅人が発見したという。

(後書き)

<a href="http://plaza.rakuten.
co.jp/kizzforute/" target="|bl
ank">弟のHPが舞台となっている小説です。
弟のHNがまだキッズフォルテだったときのものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1708a/>

幻想街

2010年10月8日15時12分発行